

名古屋市立病院臨床研究審査委員会



～臨床研究の新しい風～

編集人：名古屋市立東部医療センター 臨床試験管理センター センター長 村上善正
Tel. 052-721-7171 (内線 2355) e-mail: phkoike@higashi-hosp.jp
<http://www.higashi.hosp.city.nagoya.jp/> No. 69 Dec. 2016



本誌は、臨床試験管理センターで入手する最新情報などを多くの皆様と共有するNEWS誌です。

【主な話題：日本臨床薬理学会学術総会参加記】



「2016年を終えるに当たり」

名古屋市立西部医療センター
病院長 鈴木 悟



2016年のノーベル医学・生理学賞は、東京工業大学の岡田良典名誉教授が受賞された（日本のノーベル賞受賞は25人目）。2014年は物理学賞を日本人3人が独占し、2015年は医学・生理学賞と物理学賞のダブル受賞に日本中が沸いた。3年連続の受賞という偉業を成し遂げた日本のサイエンス研究の強みは、ホンモノなのだろうか？ 岡田教授の研究を簡単に紹介しよう。28年間一貫して細胞の「自食作用（オートファジー）」現象（体内を新鮮で健康な状態に保つために細胞の中に球形の膜が現れて、不要な物や古くなった物などを包み込んで分解していく仕組み）の研究に取り組んでこられた。「たんぱく質リサイクル機構」とも言われ、細菌から植物、昆虫、魚、人間まで、ほとんどすべての生物に共通するシステムであり、このオートファジーが働かなくなると生物は死んでしまう。

100年超の歴史を誇るノーベル賞だが、1990年代まで日本人の受賞者は多かつたとは言えない。2000年代に入ると、日本人の受賞ラッシュが始まる。ただ、生理学・医学賞は、1987年に利根川進・米マサチューセッツ工科大教授が初めて受賞された後、2012年の山中伸弥・京都大教授まで受賞者は出なかった。自然科学3賞は、授賞「条件」が賞ごとに異なるのをご存じだろうか。ノーベルの遺言には、物理学賞は「最も重要な発見又は発明をした人に」、化学賞は「最も重要な発見又は改良をした人に」、医学・生理学賞は「最も重要な発見をした人に」と書かれている。つまり、物理学賞及び医学・生理学賞は他人の成果を「改良」しただけの研究者には与えられないのであり、研究の対象を「発見」に限定した医学・生理学賞は、最も授賞条件が厳しいことになる。

2012年ノーベル医学・生理学賞を山中教授と同時受賞したのは、オタマジャクシの体細胞から核を取り出して卵に移植し、カエルを誕生させることに成功した英国のジョン・ガードン博士だった。言い換えれば、ガードン博士の研究はカエルのクローンを生み出したことにある。偉業の達成は1960年代であった。だが、同じ英国人で、1996年に世界で初めて哺乳類の体細胞からクローン羊ドリーを作り出したイアン・ウィルムット博士は選ばれなかった。2008年、日本に招かれたウィルムット博士が、ガードン博士と山中教授と共にシンポジウムに登壇されたことがあった。このとき、主催者が「将来、この3人がノーベル賞を同時受賞するかもしれません」と紹介したという。3人の業績に共通するのは、時計の針を過去に戻し、大人の細胞を受精卵と同じ状態にしたことである。その4年後、カロリンスカ研究所が発表した医学・生理学賞の授賞者リストには、ガードン博士と山中教授の名前しかなかった。ノーベル賞は「最大3人まで授与できる」というにもかかわらずの2人授賞だった。それでは、ノーベル生理学・医学賞の日本人受賞者が、山中教授まで25年間出なかったのは、なぜだろう？ それは「改良」が得意と言われてきた日本人にとって生理学・医学賞の掲げる「発見」という条件が高い壁になったせいかもしれない。「人のやらないことをやるのが、私の推進力だった」。未開の荒野に1人で挑み、開拓していった研究人生を振り返る講演の後、岡田教授は聴衆者にこう語られたという。カロリンスカ研究所の選考委員会も、この分野のパイオニアとして傑出を認めたからこそ、医学・生理学賞の単独授賞としたのであろう。私自身、城北病院時代と大学病院に戻った時に数件の臨床研究に参加する機会を得ました。小さな臨床研究でしたが、やはり“オリジナリティー”には気を遣いました。臨床研究で得た知見により、以後の臨床に自信を持って進めることが出来ました。皆さんも機会を見つけて「人のやらない臨床研究」にどんどん参加されることを期待します。

